



菅波 茂 95、12、13

国際社会で最も大切なことは「わかりやすさ」である。それは二つある。「お金」と「親切」である。「人道援助」とは究極の親切のことである。国際社会では欧米の国々は「人道援助」を実施することに相互信頼感を育成している。即ち、「人道援助の実施により私の国は何を大切に考えています」というメッセージを全世界に発信しているのである。国々によって「人道援助」を実施する目的が明確である。例えばフランスは十八世紀の市民革命で得られた「人権」である。世界中のフランス大使館には人権担当官が設置されており、人権志向の人道援助を官民共に実施してい

わかりやすさ

る。「フランスは人権を大切に考えています」という信頼感を世界中から得るために膨大な時間、人そしてお金を使っている。この事実を軽視してはいけない。世界の

人達から信頼感を得ることはそれほど困難なことなのである。

現在の国際社会の常識はクリスチャンズムである。目に見えない世界の規範である。その基本は「人権」である。「人権」とは差別しないことだけではない。もっと積極的な意味がある。それはヒューマニズム、道義的責任そして公平さである。今日的なヒューマニズムは参加することである。ほっとけない状況があればそこに駆けつけて汗を流すこ

とである。湾岸戦争の時に日本は国際社会から非難されたが、ルワンダ難民の時には非難されなかった。なぜか。AMDAなどの日本のNGOと自衛隊がコレラなどにより悲惨な状況にあったザイールのゴマに駆けつけ救援活動を実施したからである。これが真の理由である。緊急救援活動は「人道援助の華」である。なぜならだれにでもわかりやすいからである。世界中のどこで事件があっても必ず現場から報道するという米国のメディアがある。CNNである。著明なCNN現象がある。それは「緊急援助システムの有無が国の良心」という命題である。

阪神大震災の時に岡山は動いた。睜目すべし。岡山の精神風土は人道援助に直結している。

(アジア医師連絡協議会代表・題字は筆者)